

【資料紹介】

資料紹介 中京大学所蔵・名古屋東照宮祭礼図

杉 浦 綾 子

はじめに

中京大学文学部には、名古屋東照宮の祭礼行列を描いた絵画資料が三点収蔵されている。それらは三巻本、山車の刷り物と練り物（趣向を凝らした仮装行列の一種。警固ともいう）を描いた行列図二種類を一つの卷子装に仕立てたもの、冊子本、とさまざまな形態をしている。二〇一三年八月に名古屋民俗研究会の要望で東照宮祭礼図の資料見学会を開催し、その際、研究会のメンバーより、これらの資料について指摘や解説を賜った。今回はその成果を踏まえ、本大学文学部が所蔵する三つの名古屋東照宮祭礼図の資料紹介を行うことにする。

一 名古屋東照宮祭とは

名古屋東照宮は、江戸幕府を開いた徳川家康の九男になる尾張徳川家初代藩主徳川義直（一六〇〇～一六五〇）

が、父の菩提を弔うために勧請した社である。元和五年（一六一九）

九月に名古屋城三之丸の北西に家康を祀る東照宮社殿が落成した（図1）。明治八年（一八七五）、名古屋鎮台が城内に置かれることとなり、郭外にあった旧藩校の明倫堂跡である現在地に遷座された。

昭和二十年（一九四五）、太平洋戦争の名古屋空襲により本殿を含む主要な建造物は焼失した。そのうち、建中寺より義直の正室春姫（高原院）の御霊屋を本殿として移築し、再興された。（『新修名古屋市史 資料編 民俗』）

名古屋東照宮祭は、家康の三回忌にあたる元和四年に始まったと伝えられる。旧暦四月十六日・十七日を例祭日として江戸時代を通して中断されることなく行われ続けた。祭礼行列は、東照宮、山王権現、日光権現の三神の神霊を遷した神輿三基のほかに、当初は名古屋城下の数町から練り物のみが伴うものであったが、次第に各町からの山車や練り物が増えていった。宝永四年（一七〇七）まで

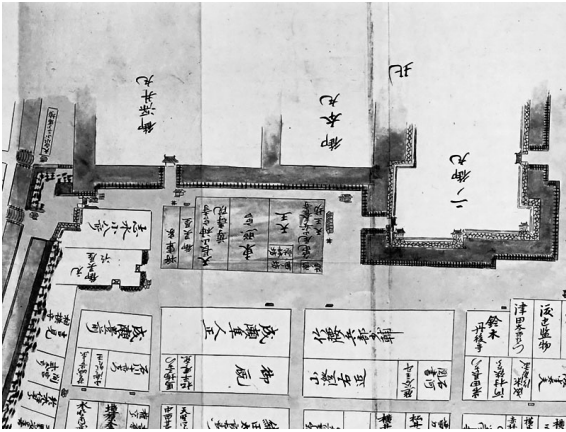


図1 御郭内之図（部分、本学文学部蔵）

には山車九輛が登場した。行列に参加する人数は、多いときは六〇〇〇人を超えたといわれる。明治維新になって祭礼行列は一時期中断されるが、明治十四年に再興され、新しい練り物での行列が始められた。昭和二十年の戦災により、山車九輛すべてが焼失した。(『前同書』、吉川二〇一六)

行列を描いた絵画資料は多く残されている。『張州雑志』、『尾張名所図会』、『森高雅筆の「名古屋東照宮祭礼図巻」』、『名古屋東照宮祭礼図屏風』(ともに徳川美術館蔵)、『名古屋東照宮祭礼図巻』、『卯月御神事図絵巻』(ともに名古屋市博物館蔵)、『名古屋東照宮山車刷物図巻』(個人蔵)などがある。祭礼の記録類では、『御祭礼旧記』、『東照宮御神事記』、『御祭礼全書』、『伊勢門水著』、『名古屋祭』などがあげられる。

## 二 名古屋東照宮祭礼図(三巻本)

「名古屋東照宮祭礼図」(以下、祭礼図と省略する)は紙本着色で、上・中・下の三巻の卷子装からなり、桐の箱に収められている。虫損も無く、資料の状態は非常に良い。上巻は三〇・八cm×八九五・八cm。題箋は無し。祭礼行列の先頭の武士から始まり、神、獅子頭、九輛の山車、茶屋家の「母衣武者」までが描かれる。中巻は三〇・八cm×一〇三四・八cm。題箋は無し。伏見町・淀町の「中巻」から益屋町の「小聖」まで、二一の練り物(警固)が描かれる。この巻が一番長い。下巻は三〇・八cm×九三九・九cm。題箋は無し。瀬戸物町の「汐汲」から旗指具足着まで、三の練り物が描かれる。続いて、東照宮神主、神馬、神輿、別当尊寿院が進み、町奉行同心で行列は終わる。描かれている人数は、上巻は二六三人、中巻は三八二人、下巻は三一六人で、合計九六一人である。

図2 1から図2 65でわかるように、本資料は左から始まるため、行列も左から右へ展開する。この祭礼図には、いつ、だれが写したものであることを示す奥書はない。また行列描写のなかには、その人物が何の役を果たしているのか、その練り物を担当する町はどこかを示すような墨書や貼り紙はなく、また町の先頭を歩く印持の旗や印にも町名に記載はない。図2 23の茶屋家の「母衣武者」で、二人の母衣衆が背負う母衣に「茶屋」と記した額をつけているのが、唯一、担当をあらわすものである。意図的に記述していないと考えられる。したがって、本祭礼図の場面の分析は、描写内容の年代が近いと考えられる、『東照宮御神事記』の享保十八年（一七三三）の記述と『張州雑志』をもとに、山車の特徴や行列参加者の衣装や持ち物を照らし合わせて推測した。

祭礼図に描かれる人物は行列に参加する人のみが描かれているように思われる。諸絵画資料には、各町の先頭を歩く町代や、練り物に付随する羽織着、杖突などがみえるが、本資料ではそれがあつた程度厳選されて描かれているように思われる。また「名古屋東照宮祭礼図巻」や『張州雑志』のような、名古屋城下の街並みなどの背景や見物客などもみられない。

行列のうち、町が担当する部分の登場順もほかの絵画資料と全く異なる。『東照宮御神事記』の「御祭礼旧記」には、「翌（慶安）三庚寅年より車警固共相増規式定凡左之通」とある。『御祭礼全書』の頭注には「異説曰承応二年以来」とあるが、慶安・承応年間（一六四八～五五）には行列の順序やいろいろな規式が定められている（田中一九六三）。したがって、諸記録や絵画資料もこの規式にのっとり、山車や練り物はすべて同じ順番で描かれている。しかし、本資料の山車は、橋弁慶車 石橋車 小鍛冶車 竹生島車 湯取神子車 道成寺車 雷神車 梵天車 猩々車（丸番号は規式による順）の順で描かれている。練り物も大半は規式順ではないが、大和町・茶屋町や、上七間町から旗指までなど、部分的に定めに沿っている箇所もある。これは意図

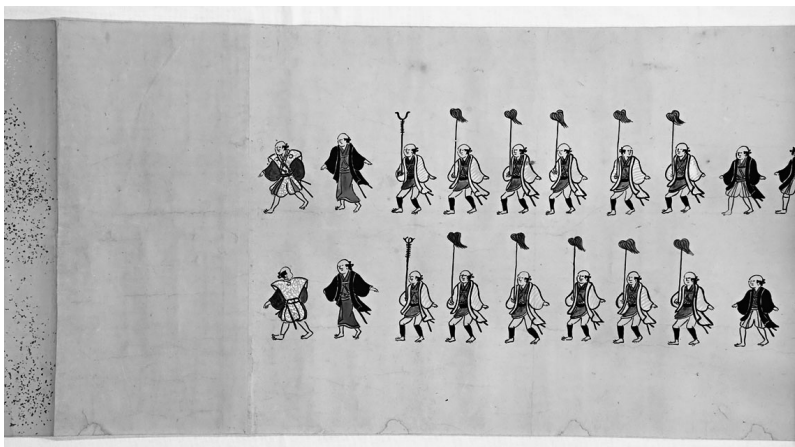


図 2-1 【上巻】先弘の町方足輕、鉤棒挟股持、長柄鎗持



図 2-2 町奉行足輕、町奉行下役

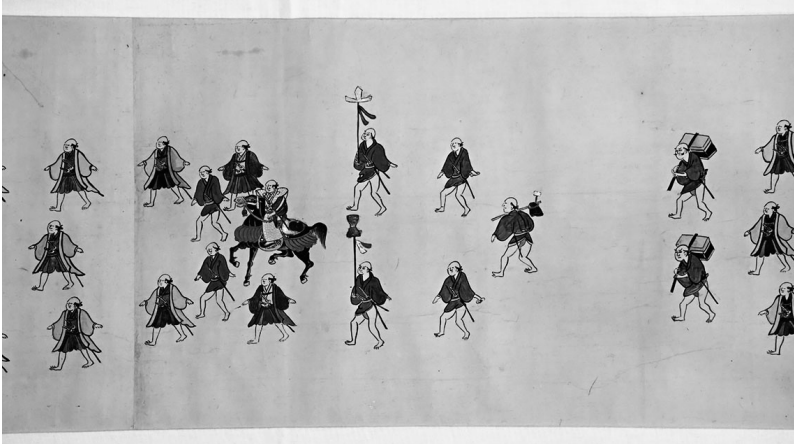


図 2-3 馬上の町奉行

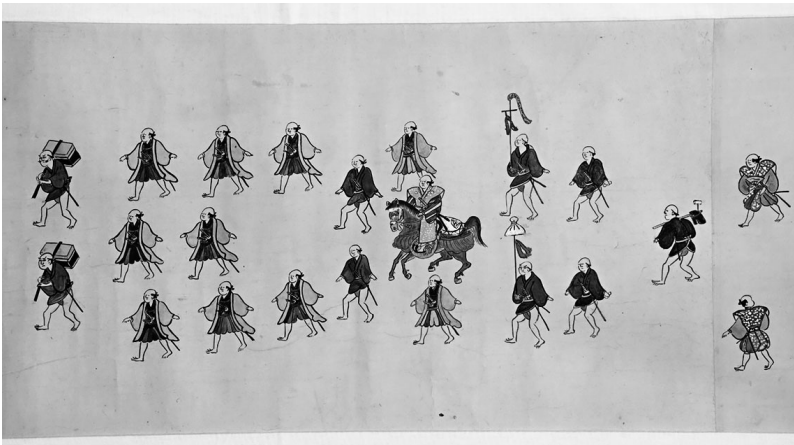


図 2-4 馬上の町奉行



図 2-5

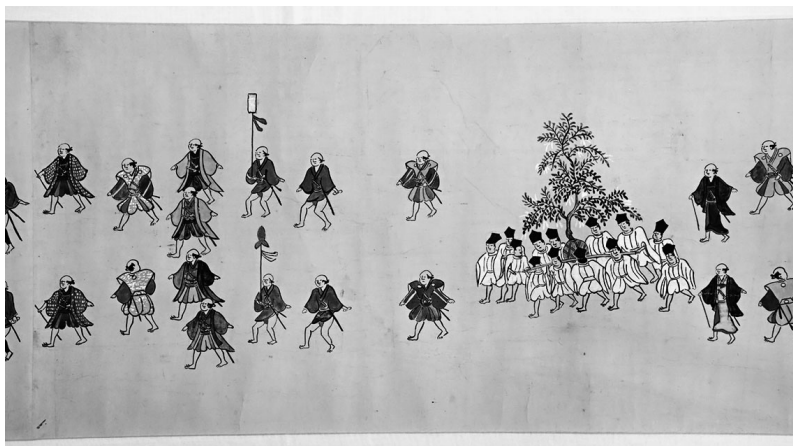


図 2-6 押之者、五十人御目付、町方足輕、榊、宰領

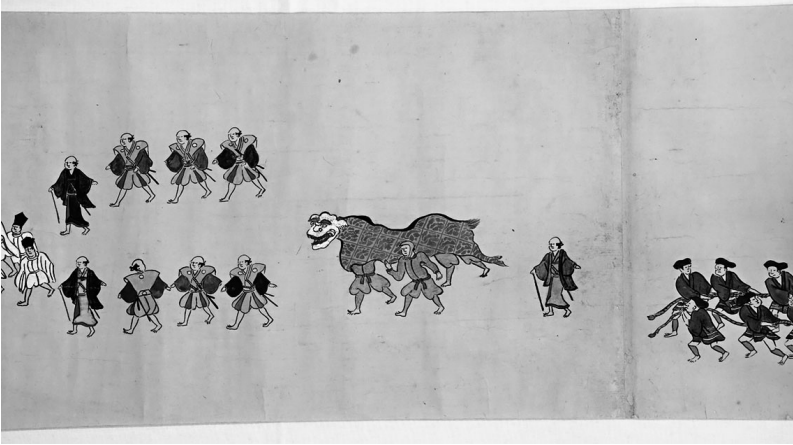


図 2-7 獅子頭、宰領

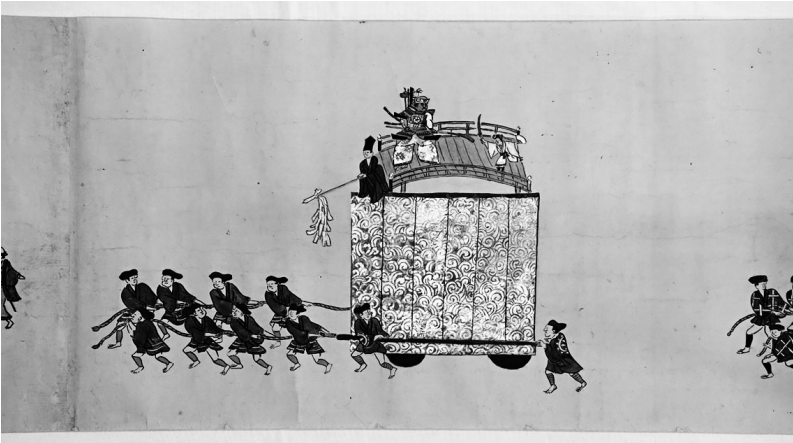


図 2-8 下七間町の橋弁慶車 (曳手・梶取 10 人)





図 2-9 中市場町の石橋車 (曳手・梶取 11 人)



図 2-10 京町の小鍛冶車 (曳手・梶取 10 人)



図 2-11 宮町の竹生島車 (曳手・梶取 13 人)

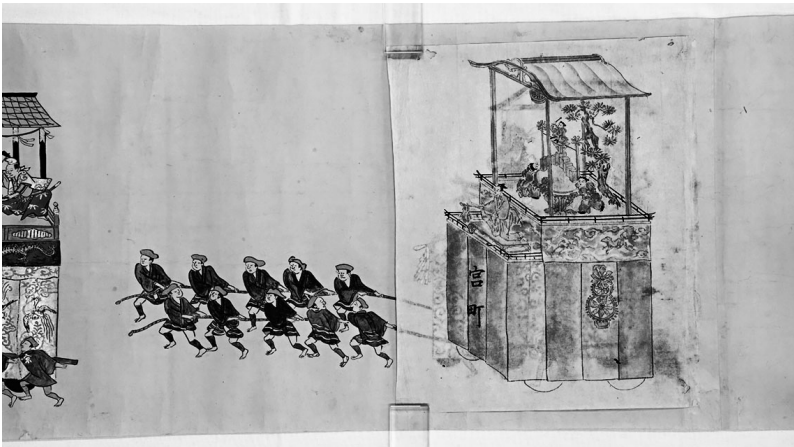


図 2-12 宮町の唐子遊車



図 2-13 桑名町の湯取神子車 (曳手・梶取 10 人)

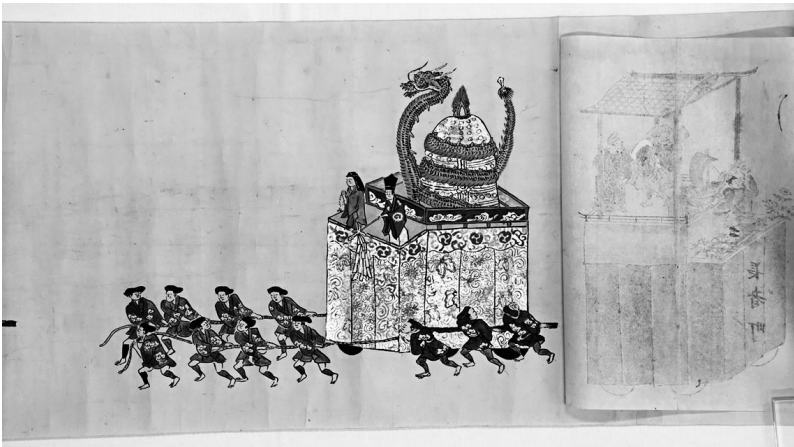


図 2-14 上長者町の道成寺車 (曳手・梶取 11 人)

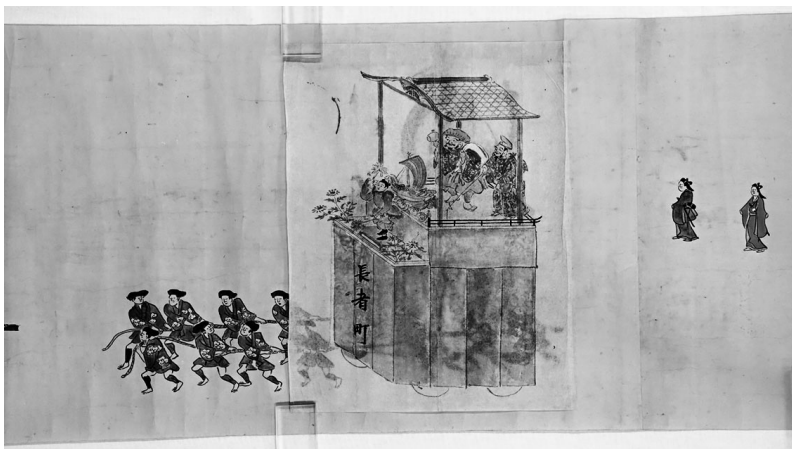


図 2-15 上長者町の二福神車



図 2-16 和泉町の小童 (小童 7 人、花釣 3 人)



図 2-17 上畠町の雷神車 (曳手・棍取 10 人)



図 2-18 伝馬町・駿河町の小童 (中間 3 人、小童 7 人、花釣 3 人)



図 2-19 伝馬町の梵天車 (曳手・梶取 10 人)



図 2-20 伝馬町の林和靖車



図 2-21 本町の狸々車 (曳手・梶取 11 人)

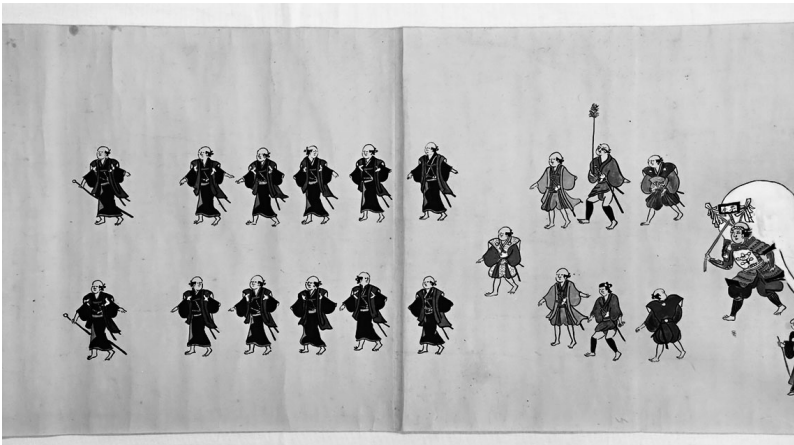


図 2-22 茶屋家の羽織着、茶屋家来、手代



図 2-23 茶屋家の母衣武者



図 2-24 【中巻】名古屋惣町代、伏見町・淀町の中巻 (中巻 8人)



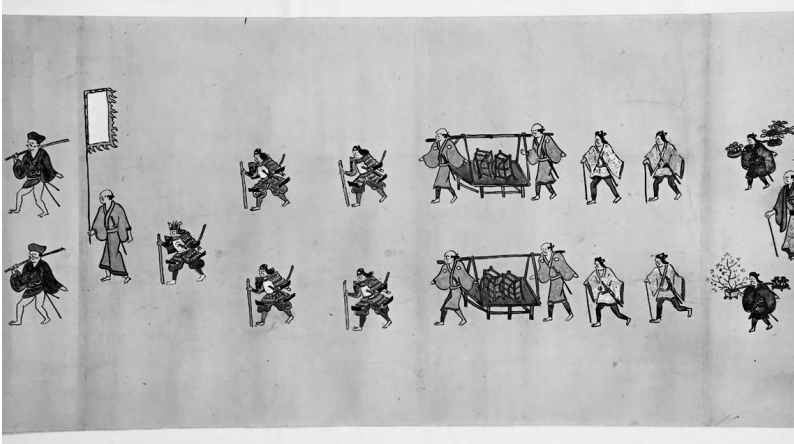


図 2-25 長嶋町の大江山武者 (印持 1 人、武者 5 人、笈釣 4 人、杖突 4 人)

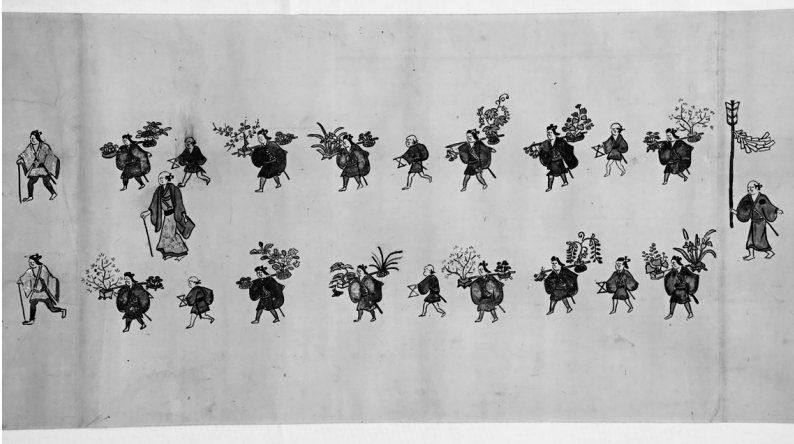


図 2-26 桶屋町の茸狩 (茸狩 12 人、宰領 1 人、床几持 6 人)

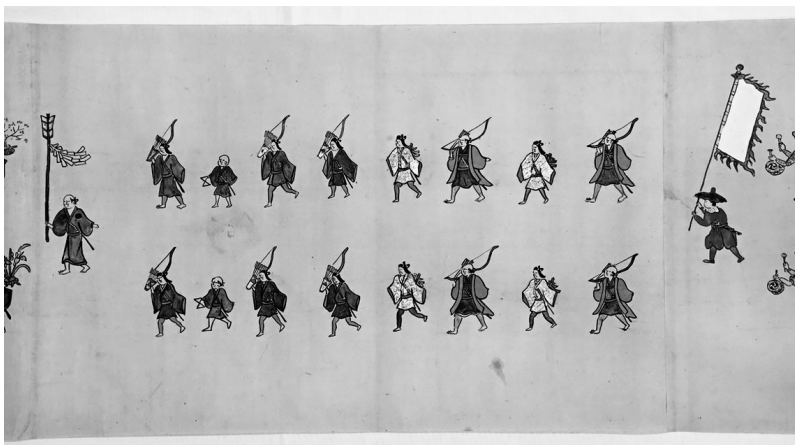


図 2-27 小牧町の矢籠持 (印持 1 人、弓持 14 人、床几持 2 人)



図 2-28 大和町の唐人 (印持 1 人、唐人 10 人、大将 1 人、日傘 1 人、曲録 1 人)



図 2-29 茶屋町の唐人  
(印持 1 人、唐人 10 人、床几持 2 人、大将 1 人、日傘 1 人、曲録 1 人)

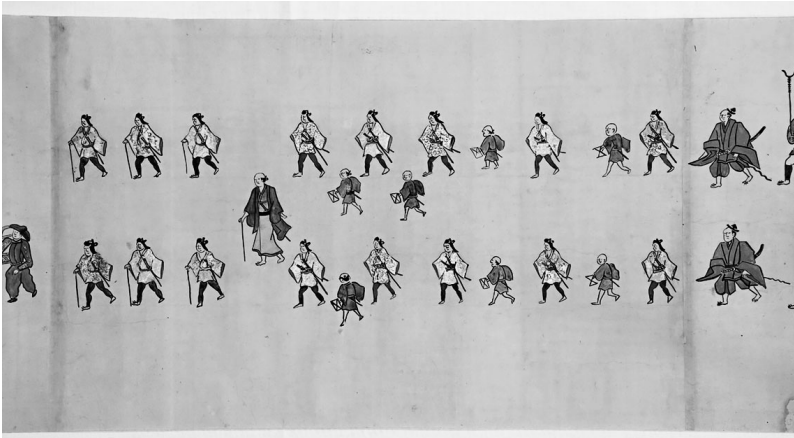


図 2-30 杖持 (6 人)、上御園町・中御園町の刀差 (刀差 10 人、宰領 1 人、床几持 4 人)

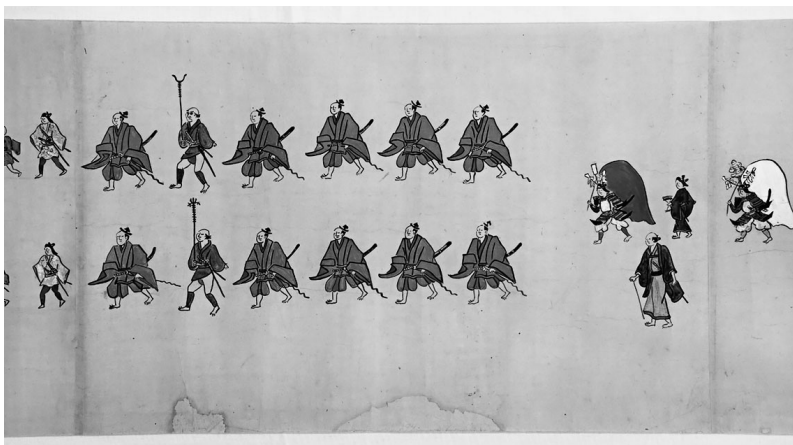


図 2-31 小桜町の雑色 (雑色 10 人、長柄鎗持 2 人)

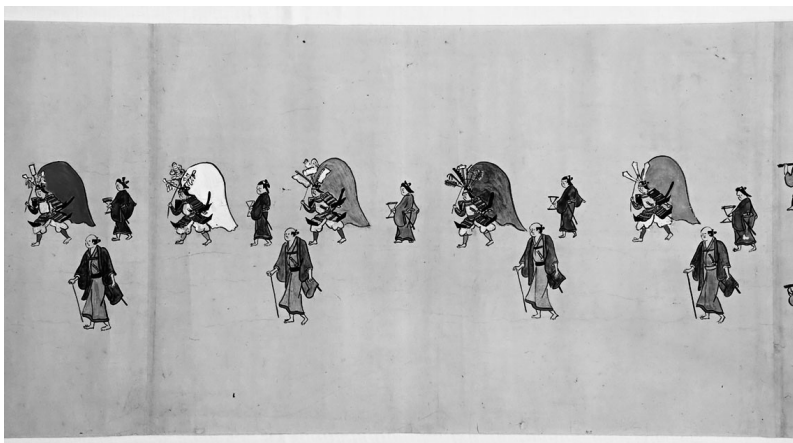


図 2-32 福井町・富田町の小母衣 (小母衣 5 人、宰領 4 人、床几持 5 人)



図 2-33 石町の鉄炮持  
(鹿 2 疋、犬 2 疋、狩場勢子 2 人、作り物猪 1 疋、鉄炮持 6 人、床几持 4 人)

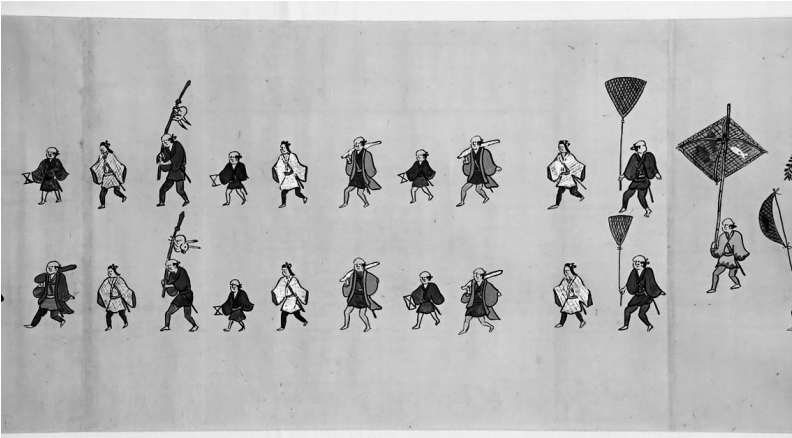


図 2-34 石町の鹿狩 (狩場勢子 6 人、兎 2 疋、鉄炮持 4 人、突き網 2 人、床几持 4 人)



図 2-35 吉田町の川狩 (網持 1 人、魚荷い 1 人、川狩小童 9 人、床几持 3 人)

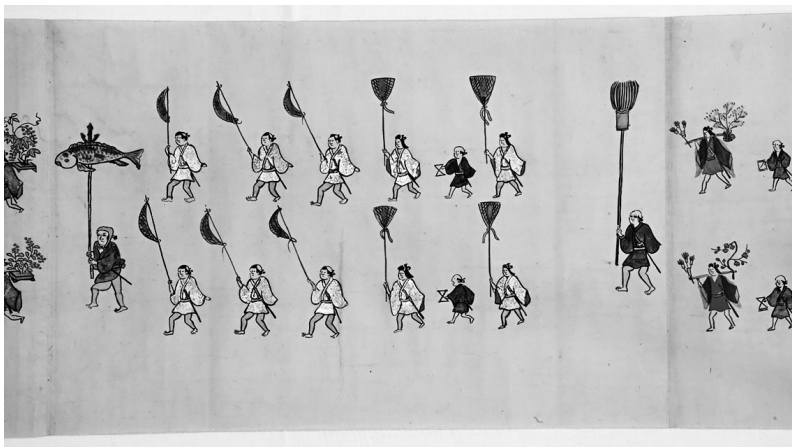


図 2-36 小市場町の川狩 (印指魚持 1 人、川狩 10 人、床几持 2 人)

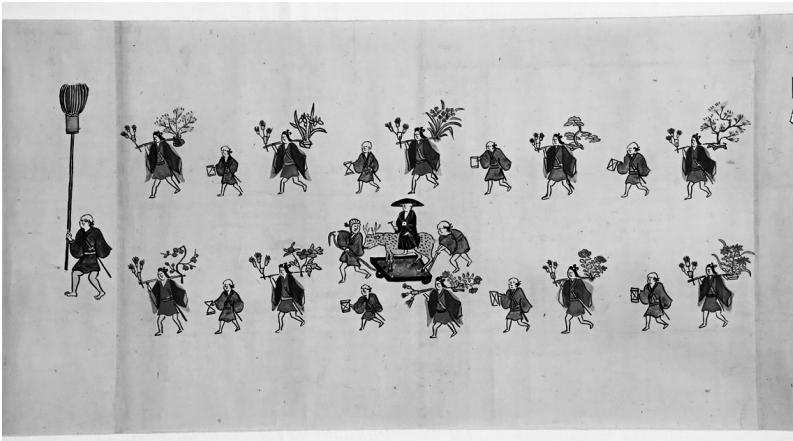


図 2-37 嶋田町の鉢叩 (印持 1 人、鉢叩 10 人、空也上人 (作物車付)、床几持 8 人)

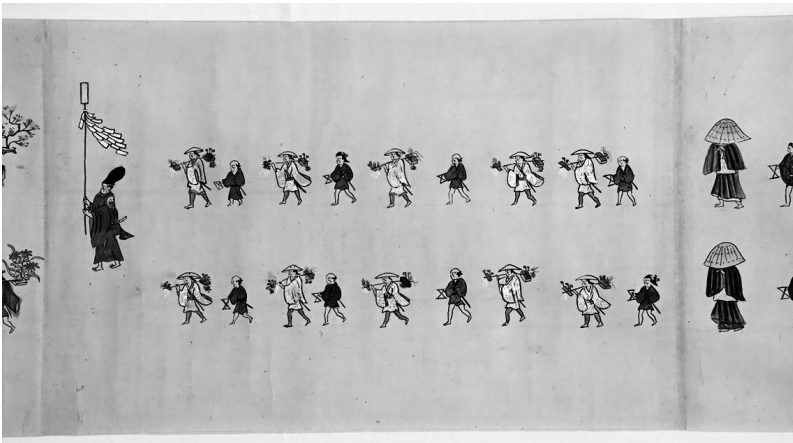


図 2-38 伊勢町の参宮 (印幣 1 人、参宮 10 人、床几持 8 人)

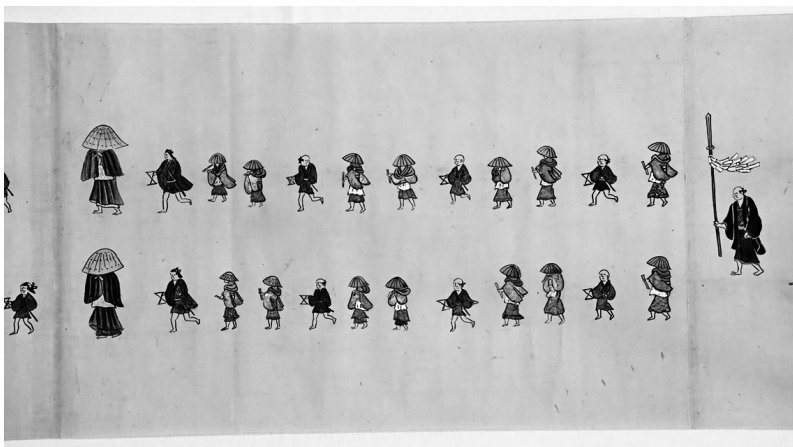


図 2-39 呉服町の普化僧 (普化僧 16 人、床几持 8 人)

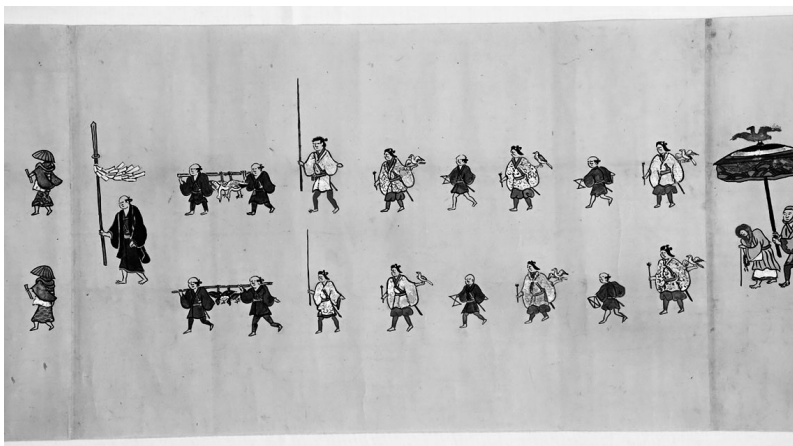


図 2-40 諸町の鷹匠 (印持 1 人、鳥釣 4 人、餌着 2 人、鷹匠 6 人、床几持 4 人)



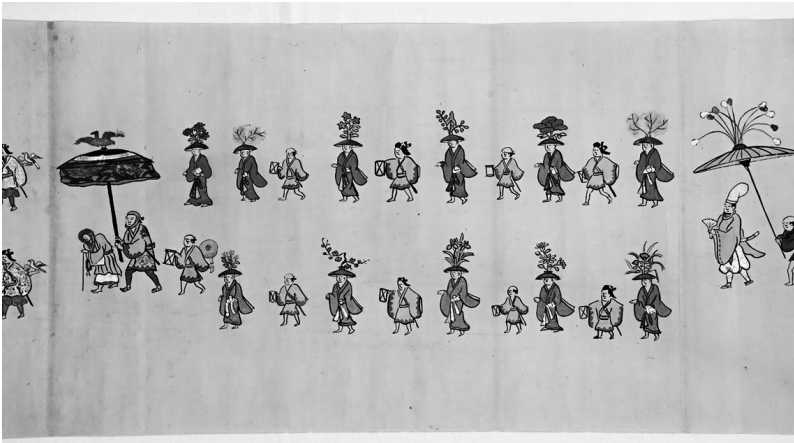


図 2-41 練屋町の熊野比丘尼 (比丘尼頭 1 人、日傘 1 人、小比丘尼 11 人、床几持 9 人)

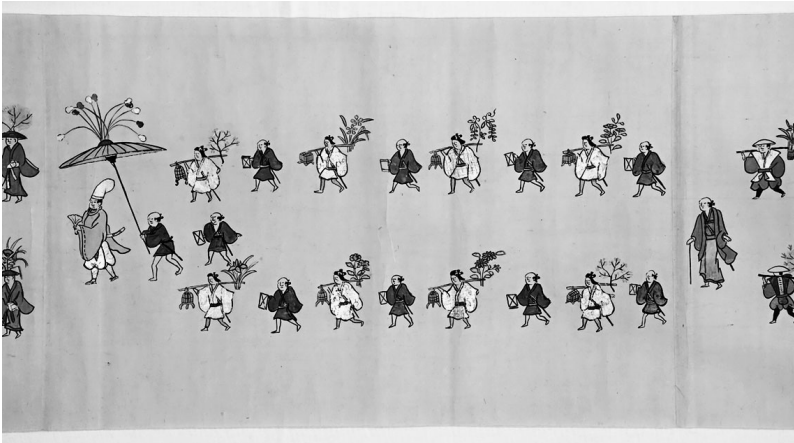


図 2-42 上七間町の小鳥落 (大将 1 人、日傘 1 人、小鳥落 8 人、床几持 9 人)

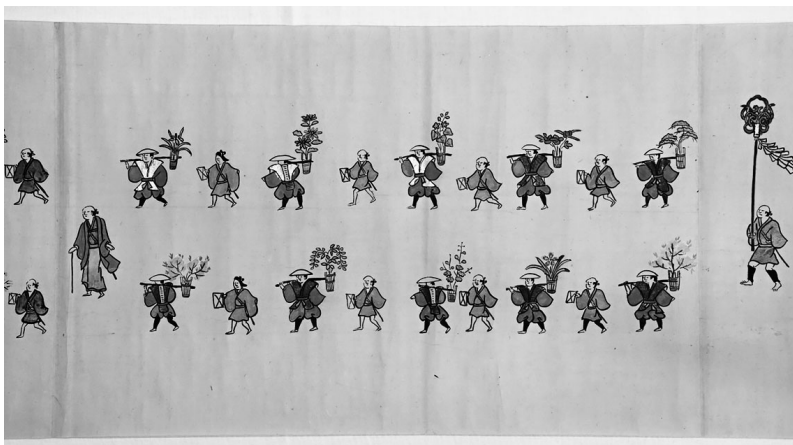


図 2-43 上島町・五条町の順礼 (宰領 1 人、順礼 10 人、床几持 8 人)

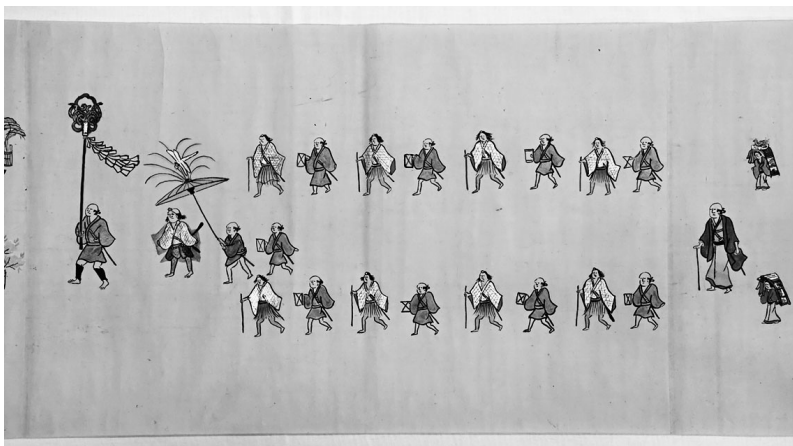


図 2-44 関鍛冶町の山伏  
(印錫杖持 1 人、山伏頭 1 人、日傘 1 人、山伏 8 人、宰領 1 人、床几持 9 人)

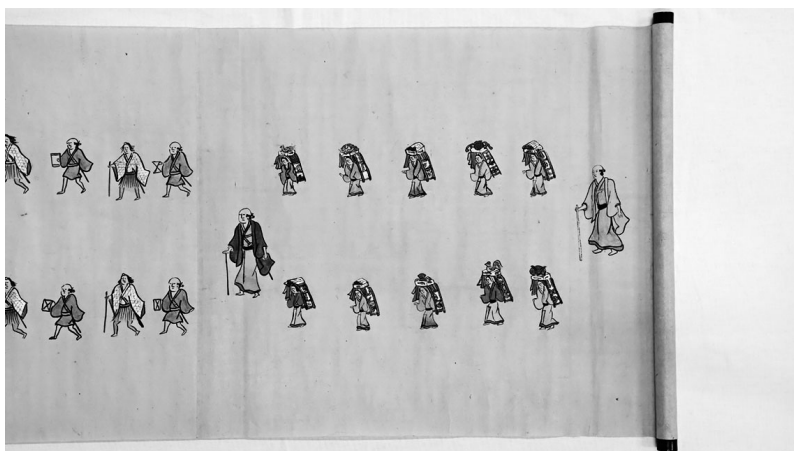


図 2-45 益屋町の小聖 (小聖 10 人、宰領 1 人)

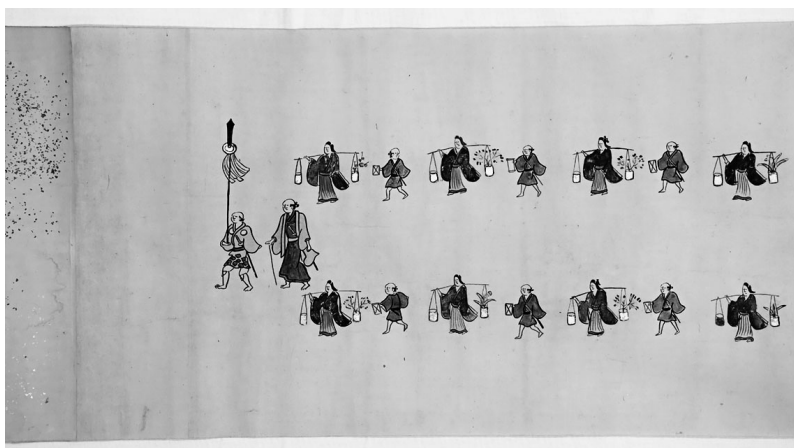


図 2-46 【下巻】大津町の汐汲 (印持 1 人、宰領 1 人、汐汲 8 人、床几持 6 人)

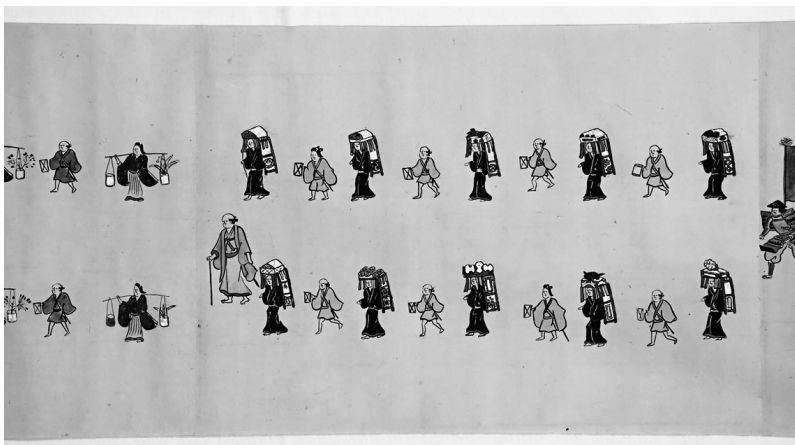


図 2-47 両替町の大聖 (宰領 1 人、大聖 10 人、床几持 8 人)

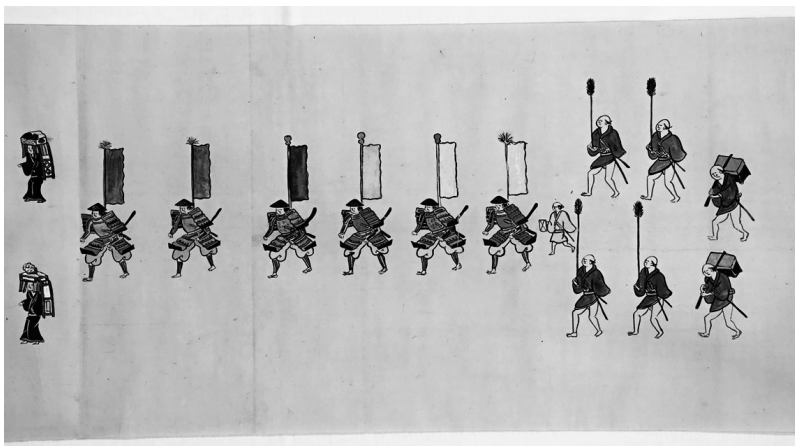


図 2-48 旗指 (旗指具足 6 人、床几持 1 人)

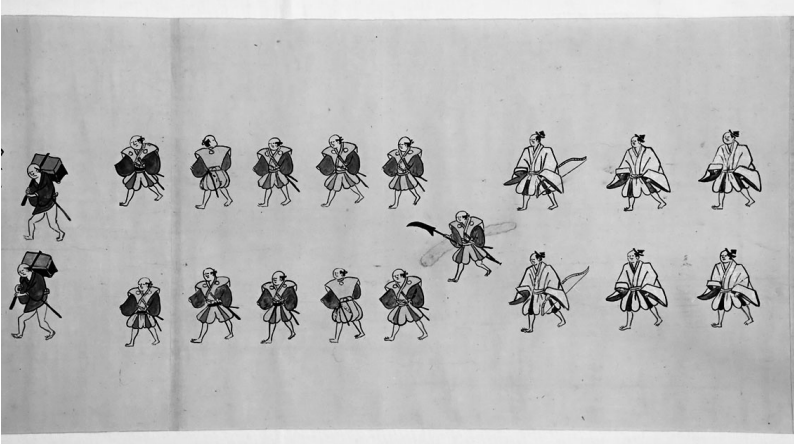


図 2-49 上下着



図 2-50 東照宮神主、白張姿の傘持

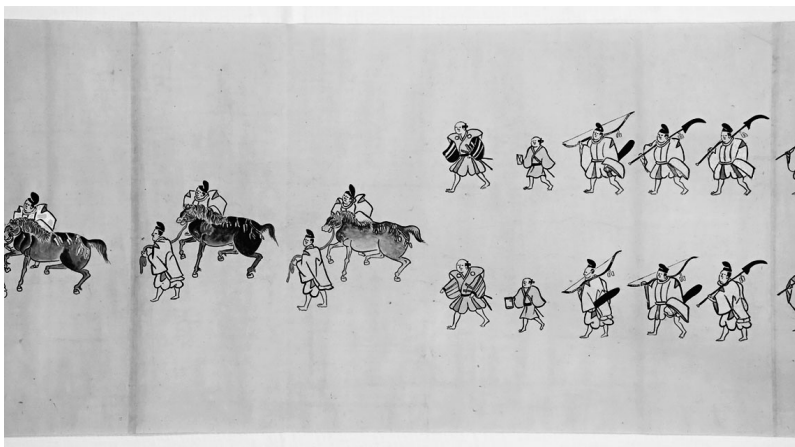


図 2-51 神馬、御弓持、長刀持

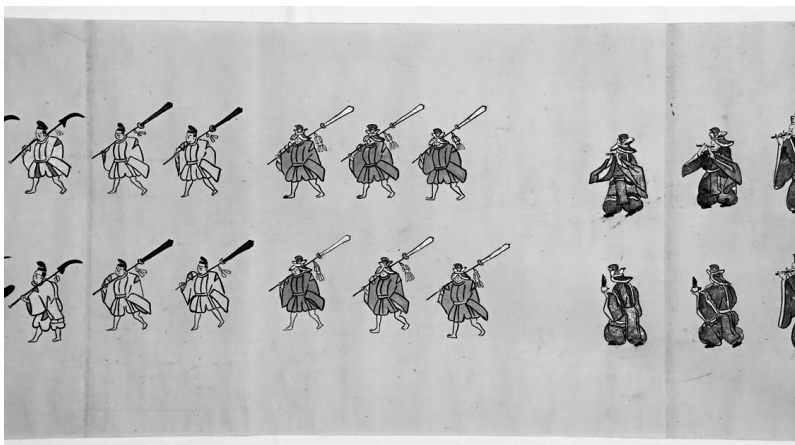


図 2-52 白張姿の鉾持、鳥甲の鉾持

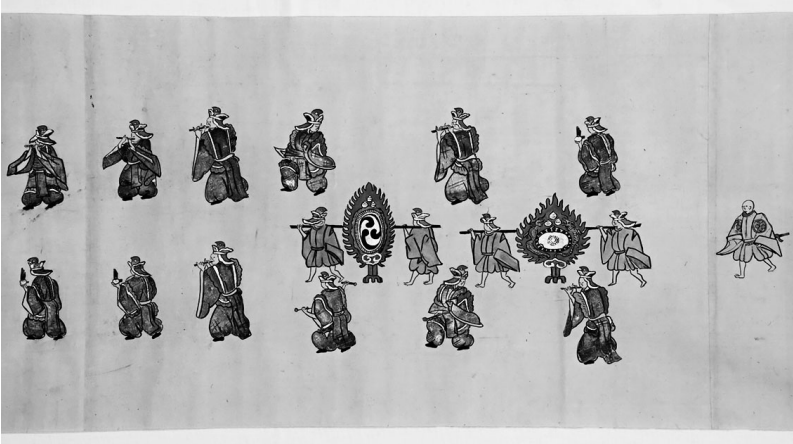


图 2-53 楽人

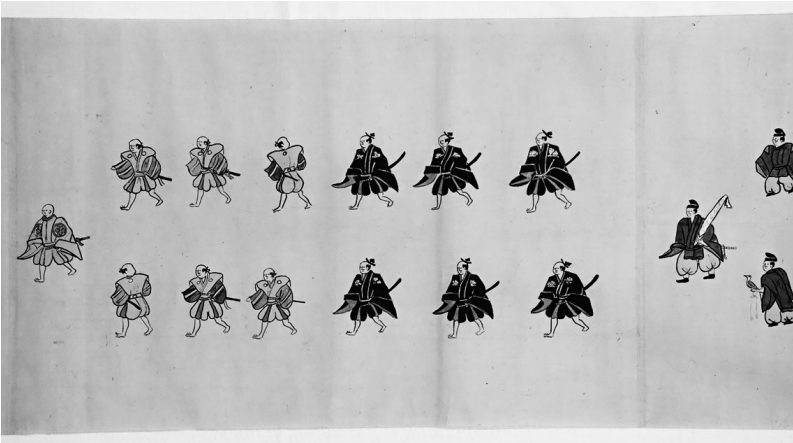


图 2-54 同朋、町代、素襖着

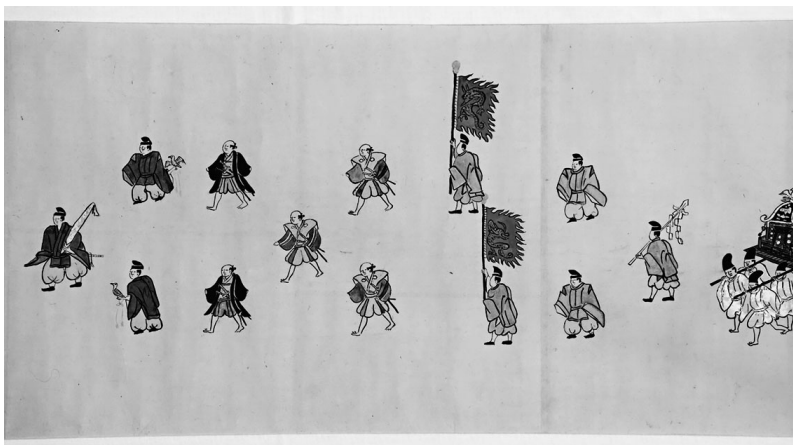


图 2-55 太刀持、鷹居、町奉行同心、足輕、御旗、祠官、御幣



图 2-56 東照宮神輿、町代上下着、素襖着





图 2-57 太刀持、町奉行下役、御旗、祠官、御幣、山王神輿

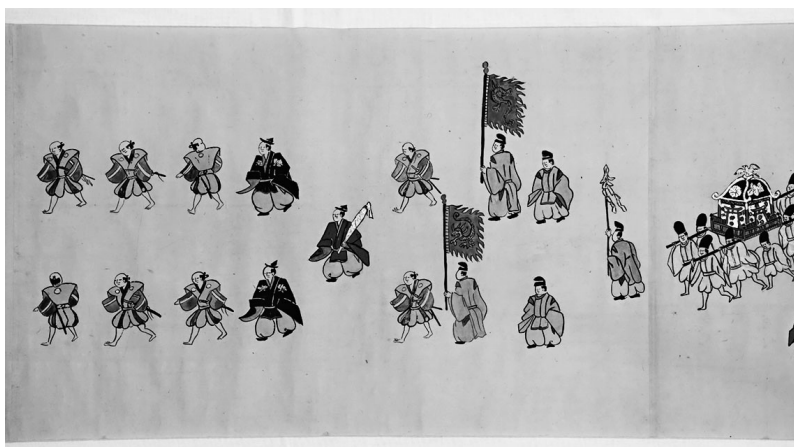


图 2-58 町々町代、素襖着、太刀持、町奉行下役、御旗、祠官、御幣

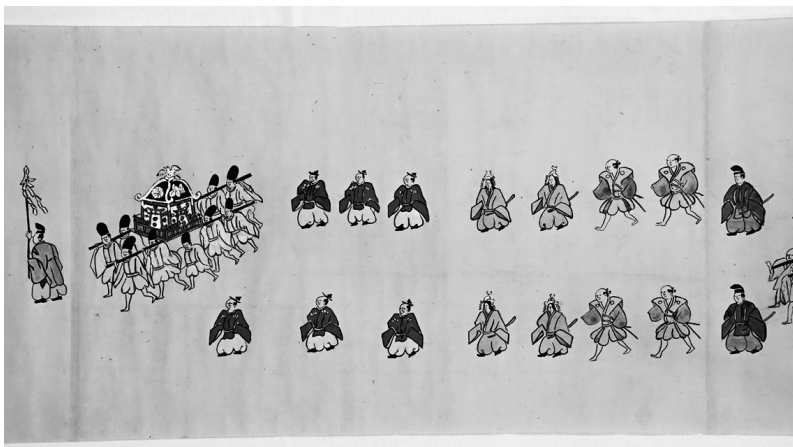


図 2-59 日光神輿、小結、小童子、尊寿院先供



図 2-60 布衣、別当尊寿院が乗る輿、馬上の末寺僧



図 2-61 馬上の末寺僧

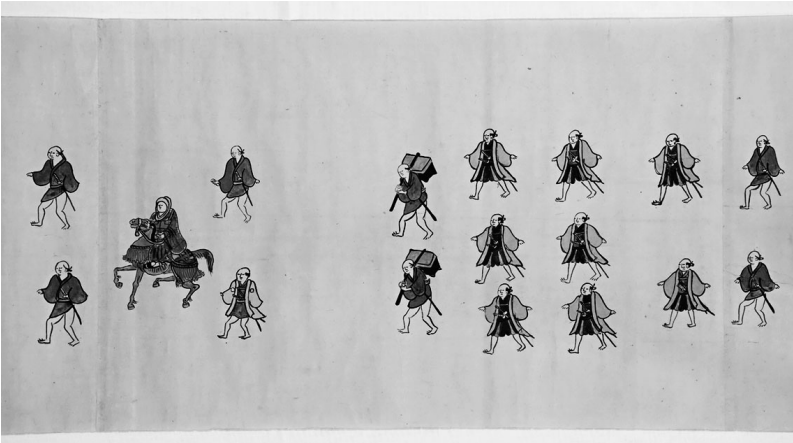


図 2-62

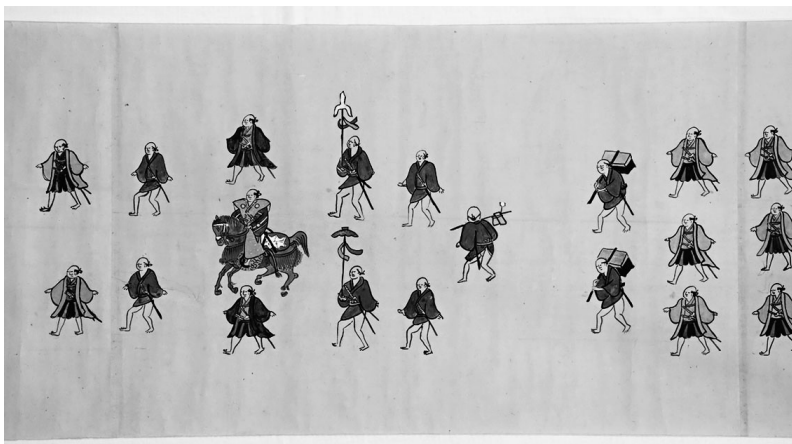


図 2-63 馬上の御先手足輕頭



図 2-64 馬上の御先手足輕頭

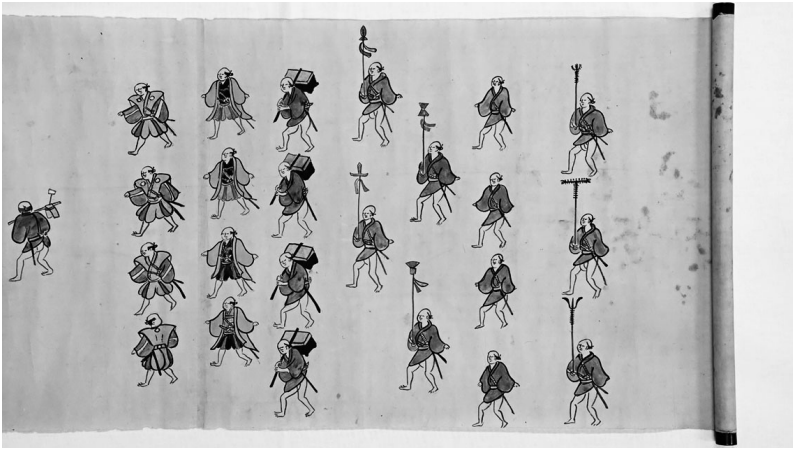


図 2-65 町奉行同心、五十人目付

的に行われた可能性や、卷子装に仕立てる際、貼り継ぐ順を誤った可能性などが考えられる。

上巻には三か所、当初描かれた山車を覆うように紙が貼られ、それにはのちの造り替えられた山車が描かれている(図2・12・15・20)。貼り紙は紙の右端を糊で貼り付けられており、それをめくればもとの絵も見る事ができる。貼り紙に描かれた山車の絵のほうが上手く、卷子を描いた人とは別の、絵心のある人物の作と思われる。

山車は二層構造で、前棚があり(雷神車は除く)、車輪は外輪式の名古屋型で描かれている。山車の上層にからくり人形を置き、それより一段低くなった前棚には采振り人形を置く。九輦のうち六輦に唐破風屋根があり、黒漆塗りである。山車全体を飾る大幕は、唐草や亀甲、花菱立涌などの模様を施した金襴を用いている。のちに造り替えられた三輦は、猩々緋で、町名の文字が入った大幕になっている。

次にこの祭礼図が、いつころの祭礼行列の様子を描いているのか、山車のからくり人形や、各町の練り物から推測してみる。本資料では上長者町は道成寺車を出し(図2・14)、伝馬町は梵天

車となっている(図2-19)。また、桜町の練り物は「雑色」である(図2-31)。「張州雑志」によると、上長者町の道成寺車と伝馬町の梵天車は、享保十七年(一七三二)に二福神車と林和靖車に替わり、小桜町は翌十八年に練り物を「雑色」から「素襖着」に替えるとする。これを手掛かりにすると、本祭礼図ではそれらが造り替えられたころの、一七三〇年代前半の様子が描かれていると考えられる。ただし、その当時に描かれたものではなく、おそらく手本となるような絵画があり、それを江戸時代後期に写したと思われる。先にも述べたが、本祭礼図には奥書がないため作者を知ることができない。画は稚拙ではあるが、絵具の使い方を習得した人物が描いたと思われる、金泥なども多く使用するなど、費用をかけた絵画である。

祭礼図の描写を示す一七三〇年代前後の祭礼行列の沿革は次のとおりである。宝永四年(一七〇七)に山車九輜が出揃い、これに加えて各町から練り物が繰り出され、行列の規模は壮大なものになっていった。享保九年に俚約のため、行列の参列者は半減されたが、尾張藩主七代徳川宗春(一六九六～一七六四)により旧来どおりに戻された。元文四年(一七三九)、宗春が將軍徳川吉宗により蟄居させられると、行列は再び半減させられた。その後、尾張藩主十代斉朝(一七九三～一八五〇)というお祭り好きな藩主の主導により、祭礼行列は再び大規模化するが、一七三〇年代はそれに先ずる一回目の盛り上がり期の時期といえる(吉川二〇一六)。したがってこの祭礼図は、そのころの華やかな行列の様子を好み作成されたものであろう。

### 三 那古野祭巻

「那古野祭巻」は、紙本彩色で、卷子装である。題箋には「那古野祭巻」とあり、寸法は一九・〇cm×四四〇・

6cmである。複数の絵画資料などをひとつの巻子にまとめて仕立てている。内容は、山車九輦の行列図（一）、各町の練り物の行列図（二）、高橋正彦宛伊勢門水の書状である。江戸時代中期から後期になると、祭礼行列の絵草紙が名古屋の版元で作られるようになる。本巻子に収められた行列図もそのころ刷られた物と思われる。描写内容は、図3 1から図3 16のとおりである。

行列図 は、九輦の山車の刷り物である。一見、山車が右から左へ九輦並んで描かれているように見えるが、前半の七間町の橋弁慶車から桑名町の湯取神子車の五輦の下部と、後半の宮町の唐子遊車から本町の狸火車の上部に紙の切れ目がある。その切れ目はぴったりと接合する。つまりこれは、もともと、上下二段に山車を描いていた刷り物であり、巻子に仕立てる際に横半分に裁断されたことがうかがえる。もとの刷り物の大きさは、縦二一・五cm、横三一・五cmである。

本町の山車の後に「本町九丁目」と、ひし形に「久」の屋号紋がある。この版元は、本町九丁目に店を構えていた菱屋久兵衛であろう。菱屋久兵衛は、『尾張名所図会 前篇』を菱屋久八郎と相合で出版した尾張書肆である（『名古屋の出版』）。屋号紋の下は文字を擦り消したような箇所があるが、判読は困難である。

行列図 は、本町の「大母衣」から両替町の「武者」まで、二六の練り物が描かれている。練り物の前や上部には担当する町名と仮装の題目が書かれている。練り物は主な衣装を着た人物のみを描き、その近くに「十五人」や「十一人」と人数が表記され、参加した人全員は表さない。限られた紙面におさめるため、コンパクトにまとめた描き方をしている。描写内容から、いつごろの行列を示しているかをみると、益屋町の練り物は「大峯入」とある（図3 8）。伊勢門水著『名古屋祭』によると、益屋町は文化八年（一八一二）に「高野聖（小聖）」から「大峯入」に替えるのである。このころと推測される。しかしながら、常盤町の練り物は、宝暦六年



図 3-1 題箋「那古野祭巻」

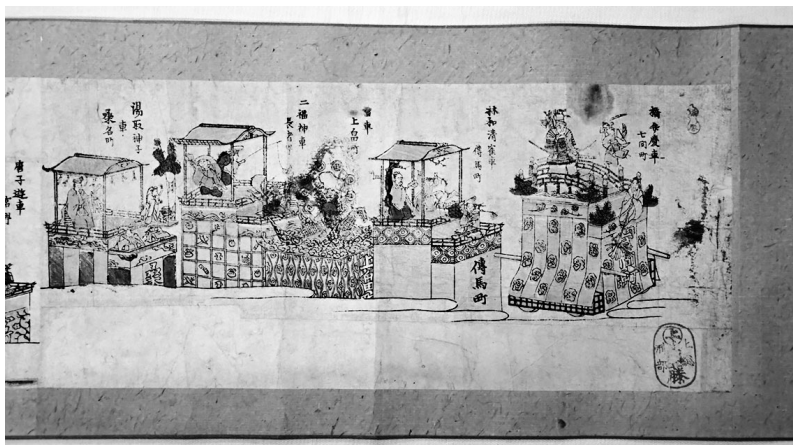


図 3-2 七間町の橋弁慶車、伝馬町の林和靖鶴車、上島町の雷車、長者町の二福神車、桑名町の湯取神子車



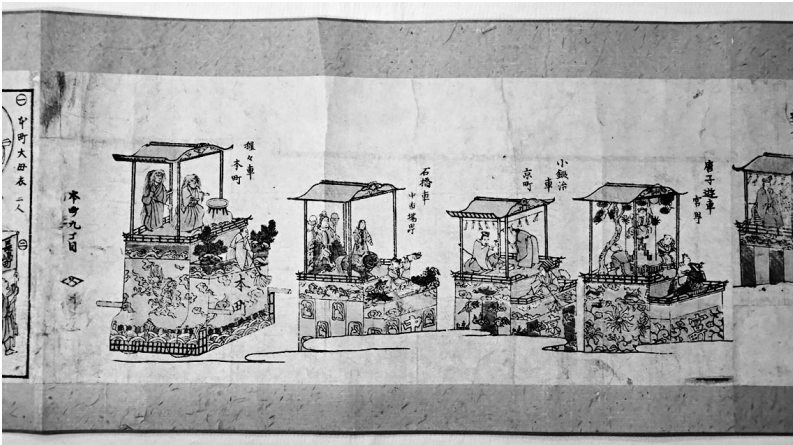


図 3-3 宮町の唐子遊車、京町の小鍛冶車、中市場町の石橋車、本町の狸々車



図 3-4 本町の大母衣、小桜町の業平東下り、福井町・富田町の小母衣、長嶋町の頼光山入、上御園町の刀差、下御園町の刀差、伏見町の刀中巻

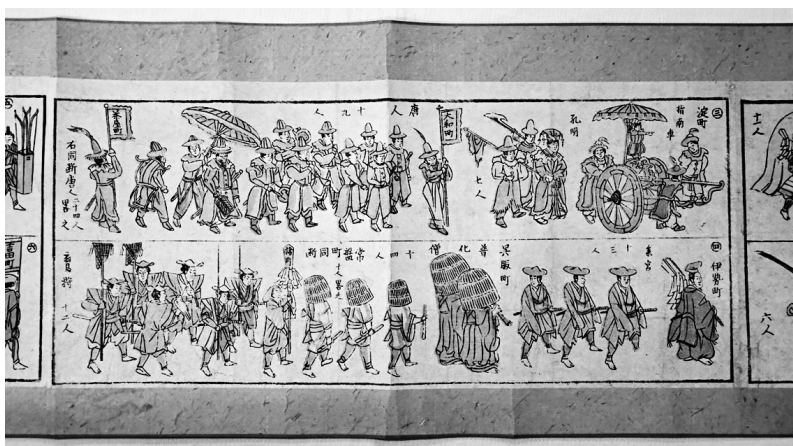


図 3-5 淀町の指南車・孔明、大和町の唐人、茶屋町の唐人、伊勢町の参宮、呉服町の普化僧、常盤町の普化僧、諸町の鷹狩

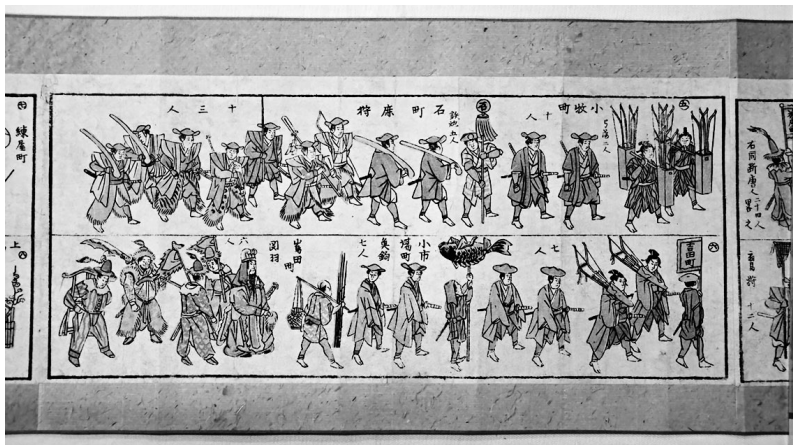


図 3-6 小牧町の弓落、石町の鹿狩、吉田町の刀指、小市場町の魚釣、嶋田町の関羽

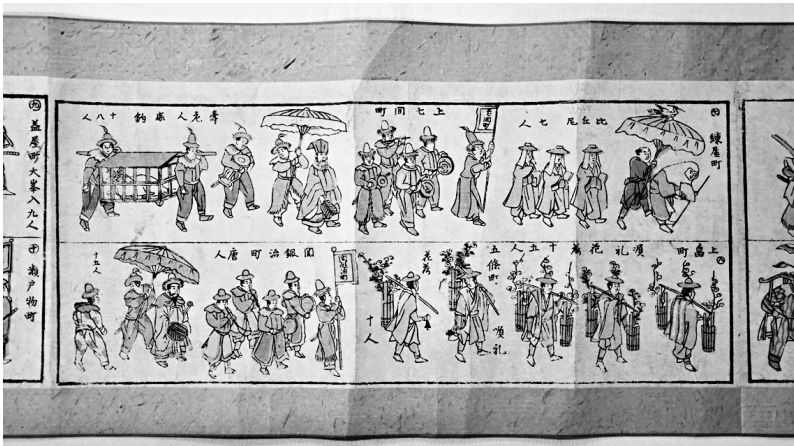


図 3-7 練屋町の比丘尼、上七間町の寿老人・鹿狩、上畠町の順礼花荷、  
五条町の順礼花荷、開鍛冶町の唐人

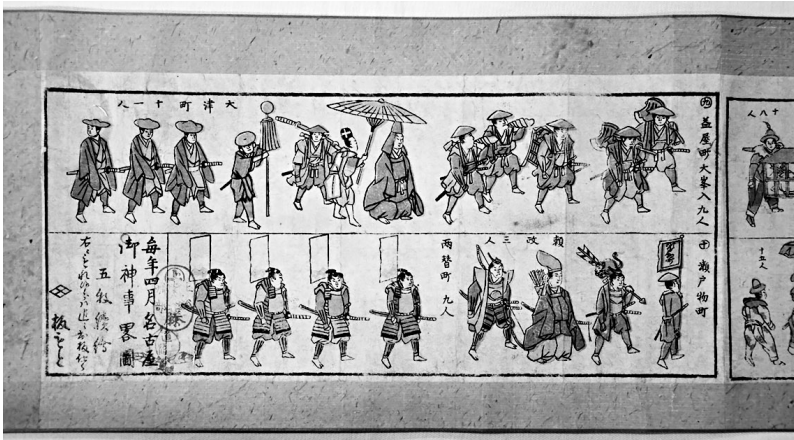


図 3-8 益屋町の大峯入、大津町の刀差、瀬戸物町の頼政、両替町の武者

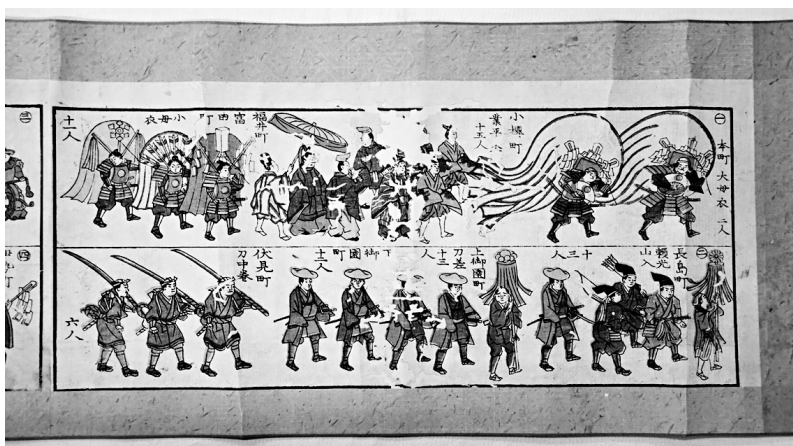


図 3-9 本町の大母衣、小桜町の業平東下り、福井町・富田町の小母衣、長嶋町の頼光山入、上御園町の刀差、下御園町の刀差、伏見町の刀中巻



図 3-10 淀町の指南車・孔明、大和町の唐人、茶屋町の唐人、伊勢町の参宮子供、呉服町の普化僧、常盤町の頼朝

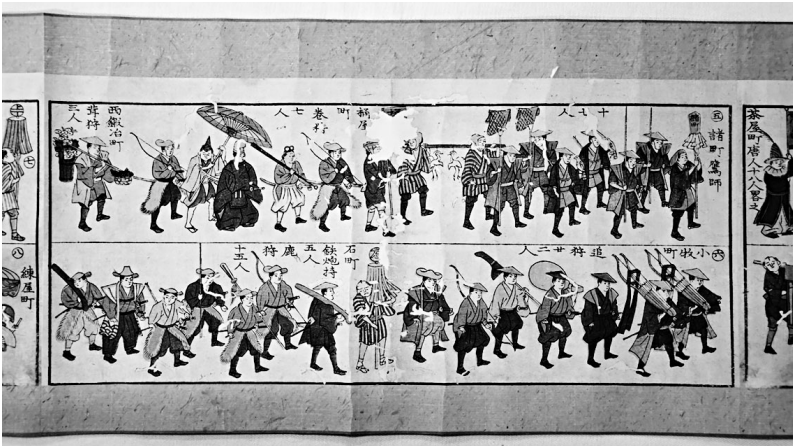


図 3-11 諸町の鷹師、桶屋町の巻狩、西鍛冶町の茸狩、小牧町の追狩、石町の鉄炮持・鹿狩



図 3-12 吉田町の刀差、小市場町の川狩、嶋田町の関羽、練屋町の比丘尼、上七間町の寿老人・唐子遊、五条町の順礼花荷、和泉町の順礼花荷

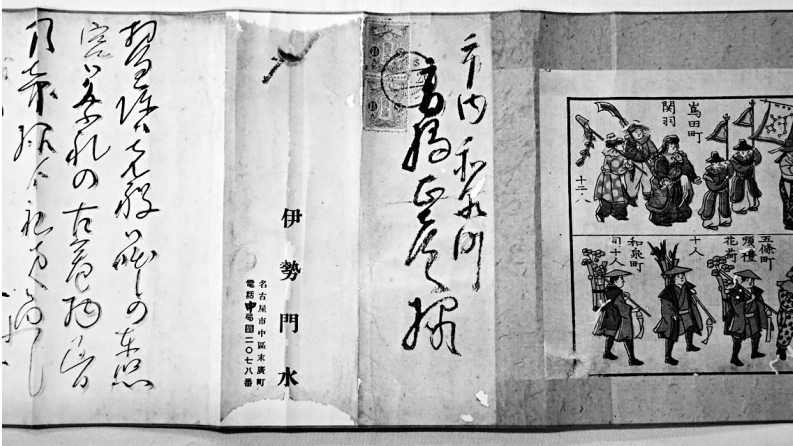


図 3-13 高橋正彦宛 伊勢門水の書状

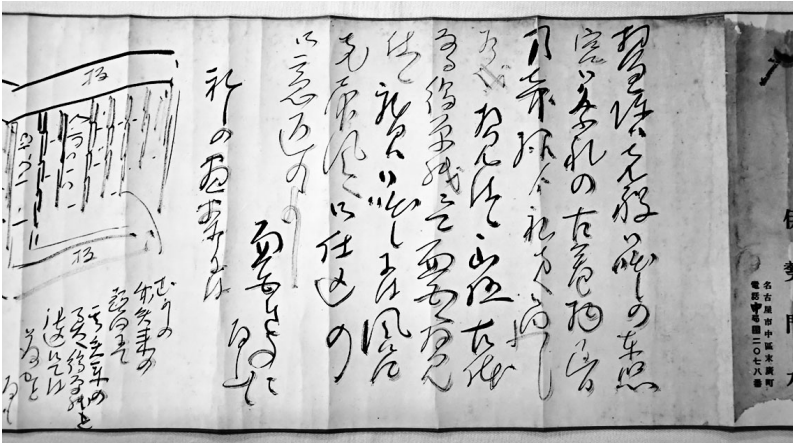


図 3-14



図 3-15

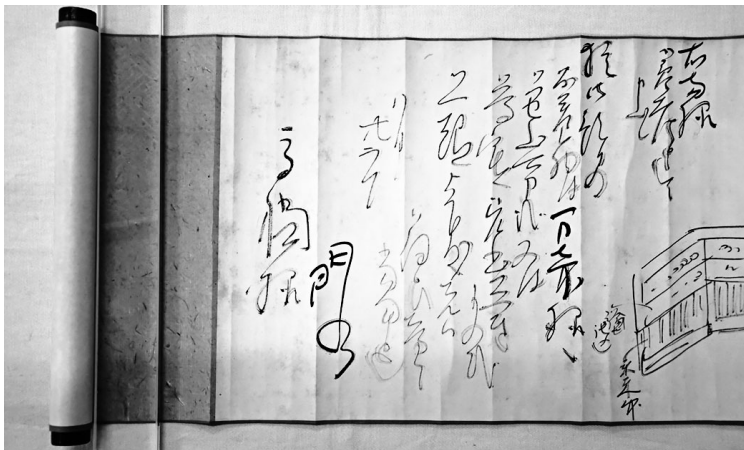


図 3-16

(二七五六)に「普化僧」から「頼朝八幡詣」に替わったとされるが、本資料では「普化僧」のままである(図3 5)。この間に題目が替わったとされる、嶋田町の「関羽」、益屋町の「大峯入」、両替町の「武者」は、旧来のものから新しいものに描き替えられている。諸記録では五〇年以上前に替わった常盤町の練り物が旧来のまま描かれているところが興味深い。

図3 8に版元として、ひし形に「x」の屋号紋がある。行列図と同じ、菱屋久兵衛であろうか。また「丸印に上」の屋号紋と「上総 刑部 内藤」の蔵書印が行列図の冒頭にも押されており、とはセットで収集されていたのかもしれない。

行列図は、本町の「大母衣」から和泉町の「順礼花荷」まで、二五の練り物が描かれている。彩色は非常に鮮やかである。行列図と比べると、桶屋町の「巻狩」と西鍛冶町の「首狩」が増えている。また、行列は和泉町で終わっており、関鍛冶町、益屋町、大野町、瀬戸物町、両替町の練り物があるはずだが、本資料では無い。おそらく、それらを描いた五枚目が欠けたまま卷子に仕立てられてしまったのであろう。行列図と描写は非常によく似ているが、桶屋町と西鍛冶町を追加したためか、大幅に変更されている。行列図で着目した常盤町は「頼朝八幡詣」に改められている(図3 10)。「名古屋祭」によると、桶屋町は元治二年(一八六五)に「富士の巻狩」に改正したとあるので、行列図はそのころの行列構成を描いている(伊勢一九一〇)。続いて伊勢門水の書状が収録されている。書状の内容は次の通りである。

【翻刻】

(封筒表)  
一 市内和泉町

高橋正彦様

「



(封筒裏)

伊勢門水

名古屋市中区末広町

電話中局長二〇七八番

拝呈、陳八先般御咄しの東照宮御祭礼の古巻物、過日万喜様を私方へ御廻し相成、拝見仕候、至極古跡なる絵草紙にて面白く拝見仕候、就而八御咄しには風呂先屏風へ御仕込の御意匠のよし、面白き事二存上候、

私の愚案には

屏風の絵

むかしの竹矢来の趣向にて、

其矢来の奥へ絵草紙を張込候ては如何かと存申候

細き男竹にて一寸間位の矢来形

或は又

屏風の絵

右両様

御参考迄二申上候

矢来竹

絵図張込

猶御預りの別巻物は万喜様へ御返上可申哉、又は尊宅へ差出スへきもの哉、御一報被下度、先八御伺ひ旁二当用迄

八月廿二日

書状を出した伊勢門水（一八五九～一九三二）は、名古屋出身の和泉流狂言師で日本画家である。本名は水野宇右衛門。明治四十三年（一九一〇）に『名古屋祭』を執筆し、名古屋東照宮祭をはじめ、名古屋周辺の祭りについても考察している。宛先の高橋正彦は、明治から昭和時代前期の実業家で、「高彦將軍」と呼ばれた実業家・高橋彦次郎の長男である（『人物興信録』データベース）。書状は、門水が、東照宮祭礼の古巻物を風呂先屏風に仕立てたいという相談を受け、屏風の図案を高橋氏に提案したものである。

#### 四 名古屋東照宮祭礼行列図

「名古屋東照宮祭礼行列図」は多色刷で、冊子装である（以下、冊子本と省略する）。本資料も、「那古野祭巻」の行列図と同じように、江戸時代後期に販売された刷り物のひとつと思われ、冊子として綴じられたものである。一五・三cm×一七・三cmで、六丁からなる。表紙に題箋などは無い。行列の最後に「右五枚続絵 再板」とある。作成年代は不明であるが、図4 1の上段に駿河町の「曾我兄弟」が描かれている。『東照宮御神事記』の慶応元年の記事によると、駿河町は慶応元年（一八六五）より伝馬町から分かれて曾我兄弟警固に替わるとある（『新修名古屋市史 資料編 民俗』）のでそのころと推測される。描写は「那古野祭巻」の行列図とよく似ている。本冊子本には「曾我兄弟」が追加されているところから、行列図を修正し、発行したのであろう。

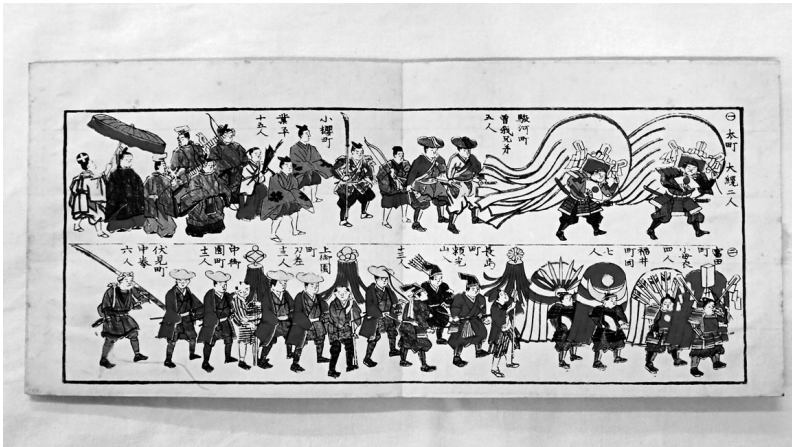


図 4-1 本町の大幌、駿河町の曾我兄弟、小桜町の業平、富田町の小母衣、福井町の小母衣、長嶋町の頼光山入、上御園町の刀差、中御園町の刀差、伏見町の中巻



図 4-2 淀町の指南車・孔明、大和町の唐人、茶屋町の唐人、伊勢町の参宮子供、呉服町の普化僧、常盤町の頼朝





図 4-5 関鍛冶町の唐子、益屋町の山伏大峯入、大津町の弓鉄炮持、瀬戸物町の頼政、両替町の子供武者、幟先



図 4-6

## まとめ

以上、中京大学文学部が所蔵する東照宮祭礼図三点の資料紹介をした。「名古屋東照宮祭礼図」は、江戸時代後期の製作と思われるが、その行列の描写は一七三〇年代の様子を描いている。この時期は、祭礼行列の最初の華やかなころであり、それが好まれ描かれたと思われる。また、上巻の山車にはのちに造り替えられた山車の絵が貼られているが、中巻から下巻の練り物には、仮装の題目が替っても改正されたことは表されていない。祭礼行列のなかでも山車に重きをおいていたことがうかがえる。

「那古野祭巻」や「名古屋東照宮祭礼行列図」のような行列図の刷り物の流行には、名古屋の出版業界の発展が大きくかかわっている。江戸時代の出版は江戸、京都、大坂が中心で、名古屋の出版は京都などの書林と相合版で行われていた。寛政六年（一七九四）に名古屋の版元は開版直願の運動を開始し、独自で出版できるよう活動していった。尾張藩主九代宗睦（一七三三—一七九九）の学問振興政策と相まって、名古屋の出版は盛んになった（「名古屋の出版」）。東照宮祭礼行列も絵草紙として多く販売され、民衆もそれを入手し、行列当日以外の日でも祭りを楽しんでいたであろう。門水の書状からは、販売された絵草紙が明治以降も、屏風に仕立てようかと発案するほどに、名古屋東照宮祭礼が親しまれていたことがうかがえる。

「名古屋東照宮祭礼図」は、画力は稚拙であるものの、山車のからくり人形の細工や練り物の参加者の持ち物は詳細に描いている。また、図2 16・18の「小童」は女性の着物を着た男児というよりも、島田髻を結び、着物の裾を擦るように歩いているように見え、まるで菱川師宣の「見返り美人図」のようである。また、嶋田町の

「鉢叩」(図2 37)の衣装は赤い着物に緑色の薄手の羽織を着ていることがわかるなど、装束の描き方も丁寧である。今後は祭礼図のもととなったのがどのような絵画資料なのかを検討するとともに、参加者の衣装も分析したい。

最後に、本稿を成すにあたり、名古屋民俗研究会会員ならびに、文学部歴史文化学科の先生方に多大なご意見を賜りました。ご教授をいただきました皆様に感謝申し上げます。

〔参考文献〕

- 伊勢門水『名古屋祭』(私家版 一九一〇年)
- 沖本清美『近世中期名古屋東照宮祭礼の装束 「祭礼行列」にみる「練物従者」装束の特色と役割』『人間文化創成科学論叢』第一六卷(お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究所 二〇一四年)
- 新修名古屋市史資料編集委員会『新修名古屋市史 資料編 民俗』(名古屋市 二〇〇九年)
- 田中善一『名古屋東照宮創祀考』、中京大学論叢 教養篇 4、(中京大学学術研究会 一九六三年)
- 『張州雑志 第三卷』(愛知県郷土資料刊行会 一九七五年)
- 『名古屋の出版 江戸時代の本屋さん』(名古屋市博物館 一九八一年)
- 吉川美穂『新出の「名古屋東照宮祭礼図屏風」について』『金鯨叢書』第四十三輯(徳川黎明会 二〇一六年)
- 名古屋大学法学研究科 日本研究のための歴史情報 『人物興信録』データベース <https://ahis.law.nagoya-u.ac.jp/who/search> (最終閲覧 二〇二三年十二月)